

鉛散弾中毒のガン、ハクチョウ、 カモの行動

星子 廉彰

日本で大型水鳥が鉛散弾中毒に犯され、死亡の多発が判明したのは1989年に多発したハクチョウ33羽、1990年ハクチョウ20羽、マガン80羽のうち69羽が鉛中毒死、カモについては1991年の秋狩猟解禁日に石狩川(石狩管内)で捕獲した20羽の筋胃について40%鉛散弾が飲み込まれていた。

宮島沼で鉛散弾中毒防止対策を実施しているとき、カルガモの余り飛べない幼鳥を素手で回収、筋胃の中には隙間が無い位の散弾がびっしり詰め込まれ全く惨めであった。12個平均であった。従来からの狩猟地、繁殖沼では全く雛が育たない状態で重大な問題である。

1977年イギリスのスリムブリッジ、水きん協会を訪問したときにスコット博士からハクチョウをX線にかけると約30%が鉛散弾を飲み込んでいるとの説明があった。

1991年、IWRBが製作したビデオ(Lead Poisoning in Waterfowl)パンフレットによると鉛中毒症の外見的症状として、次の6点を挙げている。

- 1) 下腹部の胆汁による染み
- 2) 食べ物をとらなくなる
- 3) 単独になり、物陰に隠れようとする
- 4) 全身が麻痺して翼が垂れる
- 5) 活動が低下し、飛ぶことを嫌う
- 6) 酔っぱらいのように足取り不安定立てず

宮島沼での外見的症状として、次の項目が更に加わりました。

- 7) 陸地に上りたがる
- 8) 首を丸く曲げ、基部を背中に持たせる、ハクチョウ
- 9) しばしば口を半開きにする。呼吸困難。貧血状態。ハクチョウ類
- 10) 首を激しく振り、しわがれた甲高い声を連続して出している
- 11) しきりに水を飲む、呑み込めずに水がだらだら垂れる
- 12) 神経が犯されているのかよく指先を嘴で引っ掻いている
- 13) マガンの場合、片足を上げて1時間余り動かず、時々、頭を下げ胃液を吐き出す
- 14) 飛翔中、呼吸停止、空中から落下するものもある

解剖所見

肝臓が黄疸で黒褐色に変色し、周りがちょっと黄色くなる。腺胃が肥大する。更に筋胃内壁が肥厚している。